



私にとって、男女共同参画は特別なことではない

吉田武保さん

よしだ たけやす / 『登別市男女共同参画社会づくり推進会議』副委員長

3年前、当時会長を務めていた『幌別中学校区・おやじの会』の代表として、市の男女共同参画基本計画の検討委員会に初めて参加したとき、自分はこの委員会でやっていけるのか、女性のための委員会ではないかと真剣に考えていました。

その後、何回か会議に出席しているうち、自分が普段の生活で当たり前に行っていることが男女共同参画のひとつだと次第に気がつくようになりました。

私の家庭は、以前から共働きでしたので、仕事で妻の帰宅が遅い日の家事は私がやっています。

自分が子どものころは、男は台所に入るべきではないと言いつけられてきました。でも、結婚したら、家事や育児は夫婦が協力してやらなければならないと思い実践しました。私にとって、男女共同参画は、特別なことではなかったのです。そのことに気づいたら、違和感なく会議に参加することができるようになりました。

今は共働きが当たり前の世の中。家事も育児も夫婦が協力して進めることが今まで以上に重要になってきます。

『男女共同参画』という言葉の認知度は高まってきましたが、理解は必ずしも進んでいるとはいえません。

誰かの人生や生き方を否定することなく、男性も女性も一人ひとりの個人として互いに協力し、未来に向かって新しい社会をつくっていくことが男女共同参画社会なのではないでしょうか。

私は、男女共同参画に関する市民組織や市の男女共同参画基本計画の検討委員会に参加して約7年たちますが、男女共同参画に対する社会の理解は、少子高齢化などの社会問題との結びつきも指摘されるようになり、歩みはゆっくりですが、少しずつ進んできたように思います。

現在、『登別市男女共同参画社会づくり推進会議』では、子ども向けに男女共同参画の重要性や必要性を分かりやすく紹介する啓発冊子づくりに取り組んでいます。

昨年度も情報誌『アンダンテ』を作成しましたが、私たち推進会議の委員も、男女共同参画とは何かの再確認や、今まで気づけなかった『ジェンダー』を発見しながら、編集作業に当たりました。

男女共同参画は、私たち一人ひとりに関わる重要なこと。子どもも大人も、性別にこだわらず、自分の可能性を広げていくことができる社会になってほしいと思います。ただ、家事や育児に生きがいや喜びを感じている女性も大勢います。それもひとつの生き方ですから、尊重されなくてはなりません。性別だけでその人の生き方や能力、可能性を狭めないでほしいのです。

男女共同参画は、いわば一種のパートナーシップ。女性も男性も、平等に手を取り合って共に社会を担っていく必要があります。そのためには、性別にとらわれない、さまざまな生き方があった方がいいのではないのでしょうか。

**性別にとらわれない
さまざまな生き方が
あった方がいい**

三澤由比子さん

みさわ ゆいこ / 『登別市男女共同参画社会づくり推進会議』委員長



**疑問をもたないと
『ジェンダー』の解決にはならない**

合田美津子さん

ごうだ みつこ / 市民団体『のぼりべつ男女平等参画懇話会』会長



昔から、『男は仕事、女は家事・育児…』とよくいわれてきました。この性別による役割分担は、社会や文化、歴史がつくり出した男女の性差『ジェンダー』が大きく関わっていて、長い間、私たちに無意識に根づいたものになっています。

しかし、現在は女性の社会進出も進み、環境さえ整えば、女性にも能力のある人はたくさんいることが証明されています。共働き家庭の増加など、生活スタイルが多様化している現在、昔ながらの役割分担は、変えてよいのではないのでしょうか。特に今の若い人は性別による役割分担に対する考え方が変わってきていると思います。

『のぼりべつ男女平等参画懇話会』では、女性の社会参画や女性問題などの学習を行っていますが、私たちが正しい、当たり前と思ってきたことも絶対のものではないと気づかされることが多くあります。既存概念は正しいのか、間違いがないのか、女性としての視点でこれまでの価値観を問い直し、とらえ直すための機会になっています。



▲学習会
(のぼりべつ男女平等参画懇話会)

女性問題はすべての物事の洗い直し。疑問をもたないと『ジェンダー』の解決にはなりません。市は、市民と行政による協働のまちづくりを進めていますが、男性と同じく、社会を構成するもう一方の性である女性の主体的な参画がなくては、真の協働のまちづくりはできません。

そのためにも、『ジェンダー』にとらわれず、女性も男性も、さまざまな選択肢の中から自由に自己選択・自己決定ができ、その能力を発揮することができる男女共同参画社会の実現が必要です。